

2022年7月10日 半田朝礼拝

午前 10時 30分

司会 山田紀子

奏楽 小出由里子

前 奏

招 詞

II コリントの信徒への手紙 第6章1節－2節

讃美歌

讃美歌 21-12-1 (とうときわが神よ)

交 読

詩編 第100篇 (p. 109)

祈 禱

聖 書

フィリピの信徒への手紙 第3章5～15節

(新約 p. 364)

讃美歌

讃美歌 21-343-1 (聖霊よ、降りて)

説 教

今朝、わたしたちがみ言葉として聞こうとしているのは、キリスト教会最初の伝道者パウロが、とても愛していたフィリピという町にありました教会に宛てて書いた手紙の一部です。その中に、「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあ

まりのすばらしさ」とあります。

とてもすばらしい、あまりにすばらしいので言葉を失うほどです。パウロはそう言います。たとえば大きな礼拝堂に入ると圧倒されることがあるかもしれません。聖歌隊の賛美に感動して、何てすばらしいと思うかもしれません。でもここで教会の大小は問いません。フィリピの教会の伝道は、初めは屋根もないところ、川岸から始まりました。けれど、屋根のない野外での集会ということも忘れて、あまりのすばらしさに圧倒される。そこにキリスト者が生まれました。そのすばらしい出来事が起こる場所として自分の家を提供する人が与えられた。そんなふうにして、キリストの教会がフィリピにも生まれました。

教会の集会に来るようになると、「わたしたちの信仰はご利益信仰ではない」ということを時々耳にすることがあります。確かにそうかもしれません。教会の礼拝に出たら、いきな

り願いがかなったとか、仕事が上手くいくようになるというようなことを、そんなに期待しないほうがいいかもしれません。もちろん、そうしたことも神さまからの贈り物としていただけるかもしれませんが、けれど、たとえそういうことが何もなくて、世間的に言えば良いことがなくても、ここで知るすばらしさには変わらない。どんなすばらしいこともこれにはかなわない。どんな状況にあってもめげないすばらしさがここにある。パウロは、自分が知るようになったこのすばらしいことへのために、それまでに、「これはいい、これは確かに値打ちがある」と思って大切にしてきたものを、すべて「塵あくた」のように思うようになった。今まで輝くような光を放っていたものが光を失ったと言います。

　　いったい、何がそんなにすばらしいのか。「わたしの主キリスト・イエスを知る知識」、何ともすばらしいこととはこれだ。イエスを知る。イエス・キリストを知ることです。

わたしたちの人生は多くの人たちを知ることから始まります。終わりまで多くの人たちを知り続けます。あるいは知られ続ける。これを<出会い>と言います。長く生きれば生きるほど、いろいろな人と出会います。その喜びが自分を生かしてくれます。

ひとを知るのにもいろいろな知り方があります。ここで「イエスを知る」と言うとき、それはただイエスというお方について何らかの知識を得るということもありますが、それだけではなくて、ここで「知る」と言われているのは、イエスと出会う、イエスさまにお目にかかることです。

ここでは「わたしの主キリスト・イエスを知る知識」と丁寧に書かれています。何気ない表現ですが、少しずつ解きほぐしながら見ると、まずイエスという方を知る。目には見えない存在ですが、霊においては今もわたしと一緒にいてくださる。牧師が今ここでしている説教は、そのようなイエスさまを

皆様にご紹介するという務めを持っています。紹介された相手を知るのにもいろいろあると思います。ここではまず、イエスという名前を改めて知ります。ここに訪ねてくださった方はイエスという名前である。そこですぐ次に、そのイエスが「わたしの主」であることを知る。イエスがわたしの主となるべくわたしを訪ねてくださいました。

「主」という言葉は少し馴染みにくいかもしれません。少し崩した言い方にすれば「主人」、少し古い言い方をすれば、「わたしのあるじ」です。イエスというあるじがわたしにできました。「あるじができた」とは、自分はあるじであるイエスさまにお仕えする人生を始める。自分がやることなすこと、話すこと、すべては自分のあるじが望んでおられることが何であるかを問いながら、確かめながら生きる。

もうひとつ、すでに気づいておられるかもしれません。教会の集会を訪ねるようになるとすぐに知ることがあります。

それは「イエス・キリスト」という呼び名です。ところが、ここでは「キリスト・イエス」と順序が入れ替わっています。「キリスト・イエス」と言い換えると、何が起こるのでしょうか。

もともと「キリスト」というのは、ひとりのひとにつけられる固有名詞、名前ではありません。ユダヤの人たちの言葉で言えば「メシア」、救い主ということです。イエスというのは固有名詞です。わたしが横山ゆずりという名前を持っているように、イエスという、ひとりのユダヤ人としての名前を持つ者として存在してくださった方が、わたしにとってかけがえのない救い主となってくださった。わたしの救いはこの方にある。このイエスという方がわたしの救い主になってくださった。あ
るじになってくださったから、わたしに救いが起こった。だからこのイエスをキリストと呼ぶ。この方は、わたしにとってキリストであるイエスである。「キリスト・イエス」という呼び名にはそのような信仰の思いが込められています。イエスがわたしの主、わたしのキリストとなってくださった。そのようにわ

たしはキリスト・イエスに出会った。キリスト・イエスを知った。

それではいったい、どんな救いが起こったのか。続く言葉が語ります。少し長いですが、個人訳を紹介します。「わたしの願いはただ一つ、キリストを獲得すること、言い換えれば、キリストと完全に結びつくこと（キリストのうちに自分を見出すようになるため）です。もはやわたしは自分の努力によって、つまり律法を守ることによって、神がそれで良いとされる義しさを手に入れようとはしません。わたしが求めているのは、そういうものではなく、キリストを信ずる信仰による義しさ、すなわち、信仰にもとづいて神が与えてくださる義しさです。わたしの願いは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみを共に負い、また彼の死と同じものを体験するためです。それは、もし許されることなら、わたしも復活させてもらいたいからである」。

「キリストを得るため」とあります。これも興味深い言葉です。キリストを「得る」というのは、「自分のものにする」ということです。この主は「わたしのもの」です。「あなたのもの」でもあるように、「わたしのもの」となってくださった。わたしにとってとても大切な方、かけがえのない方となってくださった。そうパウロは言います。

さらにこう言います。先ほどの言葉で言えば、「**自分の努力によって、つまり律法を守ることによって、神がそれでよいとされる義しさを手に入れようとはしない**」。「律法」とは神から与えられた生活の規律で、とても大切です。けれど、パウロがここで、「**律法による自分の義**」と言っているとき、それをこんなふうに理解するといいかもしれません。まず「義」というのは、ひとり人間が正しいひとである、嘘はつかない、間違ったことは何ひとつしない、というような意味ではなくて、神さまとの正しい関わりに生きている、神さまと正しいお付き合いをして生きるという意味です。

そうするとそこで問題になるのは、その関わりです。関わりで大切なことは、それがどれほどしっかりした関わりかということなのです。

パウロはここで、神との関わりがどこでしっかりしたものとなっているか、と問うています。この手紙の第3章で語っているパウロの言葉は、律法に生きることについては「**律法による自分の義**」、神さまから与えられた律法を自分はしっかり守ってきた。自分の神さまとの関わりは正しく間違いがなく、しっかりしたものだと言った、自信があった、確信があった、そのように生きてきたと言い切っています。ところが、それでもそれは神の前に、しっかりした正しい関わりを造ることにはならなかった、と言います。「わたしの主キリスト・イエス」を知って、そのことがよく分かった。これまでの間違いがよく分かったと言います。義、神との正しい関わり、それは自分が律法を一所懸命に守って確かなものとして、支えるようなものではない。「自分の義」ではなくて、「**神から与えられる義**」に生きることこそ

大切だと知りました。

「**神から与えられる義**」。この正しい関わりを確かなものにしてくださったのは神さまのほうです。これをしっかり支えてくださるのはわたしたちではなく、神さまのほうです。そこに生まれる神からの確かさに自分が生かされるのです。あるひとがこんなことを言いました。神さまとの正しい関わり、それは神さまとわたしたちとの間に橋が架かるようなものだ。橋を架けてくださったのは神さまだ。神さまのほから橋桁が延びてきた。大切なのはその橋を誰が支えるかということです。そのときに、こちら側のわたしたちのほうで橋をしっかりと支えているというのではなくて、橋を架けてくださった神さまがしっかりと橋を支える橋脚になっていてくださる。その橋にわたしたちはようやくぶらさがっているぐらいであっても大丈夫です。神さまの側の橋脚は確かであって揺るぐことはない。この神の確かさを信じるということが信仰です。神がわたしを捕えて、生かしてくださる。だから心配はない。それが信仰によって義に

生きるということです。

このことがさらに「**キリストの内にいる者と認められるためです**」という言葉で言い表されています。原文は「キリストのなかで自分が発見される」という意味です。自分で自分を発見するのではなくて、神によって見出される。確かにそこでわたしはわたしが求めていた自分を発見するのです。面白い言葉です。

パウロは、キリストのなかで自分を見出すと言います。キリストのなかで、神さまによって自分を見つけていただいた。そのときに知った自分こそ、自分がずっと捜していた本当の自分であることを知りました。自分で自分を支えるというのではない。キリストが自分を愛してくださり、そこで自分が生かされているのだ。それを自分が大切にすればいい。自分で自分をほめることができなくても生かされている。キリストをほめたたえて生きることができる。キリストを知ることのあ

まりのすばらしさは、そのようにキリストのなかに自分を見出すすばらしさです。

そうした言葉を重ねて、10節でパウロはこう言います。

「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」。キリストを知ることさらに言い換えると、「その復活の力」を知ることだ、と言います。

「わたしの主キリスト・イエス」は十字架につけられて殺された。一度墓に葬られたが、その墓を空っぽにしてそこから引き上げられた。一度は死人の仲間になられたイエスさまが、そこから引き出された。神の力がそのように働いて死に打ち勝ってくださいました。キリストを知ること、ここに信仰の仲間と共に集まって、キリストを知り続けるということは、復活の力を知ることです。昔そのような激しい神の力の出来事が起こったということをおもひ起こすだけではない。今わたしたちを、そのように神に復活させられたわたしたちの主キリスト・

イエスのいのちの力が生かしてくださることを知るということ
ことです。

もうひとつ、「その苦しみにあずかって」と言いました。
この「苦しみにあずかる」という言葉をもう少し別の言い方に
すると、「キリストの苦しみの仲間になる」ということです。苦
しみを分け合う者となる、ということです。食事を分け合って
食べると仲間になります。それと同じです。ここで食べ物を分
け合うのではなくて、苦しみを分け合います。誰と分け合うの
か。「わたしの主キリスト・イエス」と分け合います。キリス
ト・イエスを自分のあるじとして知るということは、自分がつ
らいなと思うときがあると、いつもそのあるじが、いつもその
つらさのなかに一緒にいてくださるということです。わたしの
つらさを分け合っていてくださることを知るということです。
そういうときに主は、わたしたちのつらさを見て、これはたい
したことの無い痛みだから一緒に忍んでやる必要もないとはお
考えにはなりません。こんなつまらないつらさは、他人には言

えないと思うときにも、主イエスには訴えることができる。助けてください。そう祈ることができます。

わたしの痛みにキリストが身を寄せてくださるだけではありません。わたしもまたキリストの苦しみを知る。そのつらさを知る。十字架につけられたキリストの痛みを知ります。十字架につけられながら、わたしたちの罪のために苦しみ、とりなしを祈ってくださったキリストのつらさ、「わたしの神よ、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。罪人はこのように捨てられるのですか」と苦しんでくださったキリストのつらさ、そのつらさがわたしのつらさになる。わたしのつらさがキリストのつらさになり、キリストのつらさがわたしのつらさになる。わたしたちの苦しみ、つらさの意味は、内容がすっかり変わった。そのように、苦しみにいて、とても深く、とても親しくキリストと共に生きるようになる。

最後に聴きたいのはこの言葉です。「その死の姿にあやか

りながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」。ここではキリストの十字架の死の姿とわたしの死の姿がひとつになる。「苦しみの仲間」は「死の仲間」です。わたしたちはまだ地上で生かされています。まだ死者の仲間にはなっていません。でも、やがて仲間入りをします。墓に葬られる。けれどキリストが、わたしのあるじが墓から呼び出されたように、わたしも呼び出される。わたしたちはキリストのいのちの仲間、いのちを分け合う仲間です。お墓は永遠のものではありません。だからある人は、キリスト者は「永眠」という言葉を使わなくてもいいとも言います。永遠に眠り続けるということはいえないからだ。必ず目を覚ます。キリストがわたしたちに先立って甦ってくださっているように。

キリストを知るということ、パウロはそのことを語ってくれました。いわばわたしたちの代表者です。今朝わたしたちは、そうしたパウロの言葉を、わたしたちへの慰めの言葉として聴きました。どうかわたしたちすべてが、このキリスト・イ

報 告 週報の 3 頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>